

新資料の紹介

○信綱八歳詠を含む短冊三枚

昨年六月、松阪市にお住まいの魚住満也氏から、信綱短冊三枚のご寄贈を賜りました。



(右短冊)

詞書・雨中鹿

村雨のふるの山田のさをし（小牡鹿はいな葉の露にぬれてなく也） 八才

(中央短冊)

詞書・水辺霞

すは諏訪の海やほりのはしはたえにけりかすみなかる、あめのなか（中）川 八才

(左短冊)

詞書・としへてまつさかに帰りに

あなた（愛宕）川蚊はりたれつた、まちしむかしのわれのおもかけ（面影）にみゆ

満也氏は、鈴鹿市若松の（株）清水三郎商店がご実家で、同地在住の姪御さんを通じて、義父の魚住誠一（明治二十二年〜昭和二十五年）が集めていたと思われる信綱の短冊をご寄贈くださいました。

信綱短冊三枚のうち二枚は、信綱八歳の時の作歌で、当時信綱は松阪に住み、父弘綱とともに鈴屋歌会等の歌会に出入りし、作歌の修練に励んでいました。この二枚の短冊は、筆跡も歌も立派であり、信綱の修練の跡がよくうかがえます。

また、「としへてまつさかに帰りに」の題で詠まれた信綱一首は、十一歳で松阪を離れた信綱が、長い年月を経て再び松阪を訪ねた際に詠んだ歌で、釣りをして遊んだ幼少時の思い出をうまく詠み込んでいます。

*1: 雄鹿。季語・秋
*2: 蚊針。結などを釣るための蚊の形に似せた擬針

このほかにも、信綱・弘綱関係資料のご寄贈を幾つか賜りました。資料充実にご協力賜り、厚くお礼申し上げます。

展示室だより

「信綱の系譜」展



ただいま、信綱の系譜に連なる人々の直筆掛軸や短冊、写真等を紹介しています。

「信綱の系譜Ⅰ」と題して、信綱・雪子夫妻をはじめ、信綱の曾祖父利綱、祖父徳綱、父弘綱、母光子、弟昌綱らを取り上げ、それぞれの和歌や漢詩が記された掛軸や短冊を展示しています。

なかでも「弘綱・信綱の春秋歌」掛軸は、弘綱が「早春月 春きてもいまだかすまぬ山のはにゆふ月白し雪をてらして」の一首を、信綱が「水色の空のここかしこ白き雲のうきただよふもめでたし秋は（歌集「常盤木」所収歌）」の一首をそれぞれ記した懐紙を二枚貼り合わせた軸で、親子の歌と筆跡を同時に鑑賞することができます。



後列：右から道子（信綱5女）、富士子（同4女）、弘子（同3女）、信綱
前列：右から2人目洋子氏、延（雪子母）、雪子夫人

写真に見る信綱は穏やかな優しい笑顔をしており、写真を通して子煩悩な父・孫を慈しむ祖父である信綱を知っていただければ幸いです。

祖父信綱の思い出

古橋 洋子

私の母は信綱の四女富士子で、銀行員（小島正雄）に嫁ぎました。父は四十二歳で結核を発病しましたが、療養生活を送っておりましたが、戦争が終わり疎開から東京へ戻った一時期、西片町の祖父信綱の家の一部屋を拝借して住んでおりました。

その頃、私は女学生でしたが、或る日、祖父が何か調べるお仕事があったのでしよう。お蔵（書庫）万葉蔵）から、書物を出して運ぶお手伝いをしたことがありました。

祖父はお蔵の前の洋間に座って、いつもの小さな机の上の書物に向かつておられました。何冊目かの書物を選んだ時、ふっと我に返ったようにあわてて、「あ、どうも失礼しました」と頭を下げられたのです。私はまだ子供で、書物を運ぶなど



発行・編集
鈴鹿市文化課
連絡先 鈴鹿市神戶一丁目18番18号
TEL 059-382-9031

目次

寄稿「祖父信綱の思い出」古橋洋子 1
「曾祖父信綱と祖母綱子の思い出」菊池淳子 2
「曾祖父信綱と祖母綱子の思い出」山田洗子 3
記念館ニュース「平成二十六年度特別展報告ほか」 3
信綱一首（二十九） 展示室だより 4

曾祖父信綱と

祖母綱子の思い出

菊池 淳子

私の祖母綱子（工学博士・東大教授の朝永研一郎妻）は信綱の長女として生まれ、責任感が強く、常に努力をし、何事にも「前進、前進」をモットーにしている姿は曾祖父信綱譲りで、八十二年の人生を全うするまで、前向きで努力を惜しまない人でした。

祖母は紹ぎし（刺繍の一技法）を一生の仕事として情熱を注ぎ、学生達に授業で教えたり、数多くの作品を残してくださったりしました。私達四人姉妹（姉道子、双子の妹洗子、妹葉子）の着物や帯、バッグなどの他、曾祖父の歌の色紙と祖母の紹ぎしを組み合わせた掛軸を結婚のお祝いに頂き、私達の大変な宝物となっております。

毎年お正月に、祖母と母（峯子）



昭和36年1月2日撮影
前例：右から祖母綱子、曾祖父信綱
後例：右から4女葉子、母峯子、長女道子、3女洗子、次女淳子（菊池氏提供）

に連れられて、曾祖父が暮らす熱海の凌寒荘に、新年のご挨拶に伺うのが恒例でした。私達は、海と山に囲まれた温暖な熱海がとても気に入っていて、美味しいご馳走を頂いたり、みかん狩りをしたり、温泉に入ったりのが楽しみでしたが、毎回、曾祖父から「お土産は歌を詠んで見せて下さい」とのことでしたので、東京から熱海までの汽車の中では、車窓の景色や駅弁をゆっくり味わうこともなく、皆、真剣に考え、頭を悩ませたものでした。何首かノートに書きとめた歌を曾祖父に見て頂く

と、朱筆で添削して下さい、「良い歌ができましたね」といつも優しい笑顔で励まして下さったことが、恥ずかしいやら嬉しいやら、今でも懐かしい思い出となっております。

最後に、祖母が八十歳の時に、一年かけて回顧録「竹柏の下かげ」(昭和五十五年)を一冊にまとめました。今から三十五年前のことになります。今でも読むたびに、八十歳とは思えない記憶力と文章力は素晴らしい、感心させられます。

「竹柏の葉」は葉脈がなく、二枚合わせると絶対に切れぬという強いもので、竹柏会の意味も理解出来ました。曾祖父と祖母は、この竹柏の葉の強い絆で結ばれていたように思っています。

(信綱ひ孫、信綱長女綱子の孫)

曾祖父信綱と祖母綱子の想い出

山田 光子

祖母綱子は愛情豊かに育ち、謙虚で且つ明治の女性らしく、常に凛と

して、生涯の仕事となった結ばしの他にも料理、和裁、編物にも秀でており、私共のセーターなどはすべて祖母の手編みで、更に曾孫達のおくるみ、カーデigan・帽子までも楽しんで編んで下さり、忙しい合間をぬって尽力を惜しまない姿は、心から尊敬でき、私共などとても及ばない何でも出来るスーパーおばあ様でした。

祖母は曾祖父信綱を心から敬い、教えを心に刻み、八十二歳の生涯を終えるまで、趣味を越えて仕事として結ばしに心を打ち込んでいました。皇室の方々から、帯やハンドバックなどたくさん作品を頼まれたり、二十一年余り、跡見学園短大で二人近い学生に結ばしを指導したり、今でも当時の生徒さんが全国各地でお教室を開いて楽しんでおられます。

また、九十歳近くになってもベッド上に文机を置いて勉強し続けられた曾祖父は、細くなった腕をさすりながら、私共に「オジイサンも若い時はよく勉強しました。今は骨皮筋右衛門ですが、まだまだ勉強したいことがいっぱいあります。皆もよく勉強して立派な人になって下さい」と、優しくにこやかに話されたこと

とを今でも覚えております。

小学校の授業で「文化勲章」について勉強したことを申し上げると、後日、「たくさんの子供達にも見せてあげなさい」とおっしゃられて、祖母が貴重な勲章を大切に預かりしてきて、私共の小学校に持って来て下さいました。写真ではなく、実物の文化勲章を初めて身近で見せて頂き、とても有難く感動した記憶も印象深く残っております。曾祖父に寛大な心と祖母に対する絶対の信頼があったからこそ、見せてもらえたのだと思います。祖母も机上の勉強だけでなく、自分の目や肌で直接感じる教育を小さい頃から大事にして下さり、今なお感謝しております。

このほか、子供の頃、熱海の曾祖父のお家に何うと、いろいろ良いお話をして下さったり、美味しいご馳走をいただいたり、なみなみと溢れる温泉にお庭のみかんをいっぱい浮かべて入るお風呂も楽しみの一つでした。お家の目の前を流れる小さな川のせせらぎを聴きながら眠る心地良さが、子供ながらに何とも幸せな気分になったことも、今でも懐かしく心に残っております。

曾祖父は、九十一歳六カ月の一生

また、特別展の開催期間中は、千名を超える来館者がありました。特別展を通して、「信綱がジャンルを問わず多くの人々と交遊を結んだことがよくわかった」、「人徳に恵まれた人物だったと、あらためて感じました」という声が多く聞かれました。

講演会

十一月九日(日)午後一時三十分から、鈴鹿市・佐佐木信綱顕彰会主催の講演会が開催されました。学芸員による「特別展の解説」と、花園大学講師であり当市文化財調査会会長の衣斐弘行氏による「信綱と一葉・緑雨」の講演でした。

衣斐氏は関連年譜をもとに、信綱と樋口一葉・斎藤緑雨の生涯について話されました。

また、衣斐氏は臨済宗東福寺派大

を一分たりとも疎かにせず、何事も「努力、努力」「前進、前進」をモットーに、常に「謝恩、報恩」を忘れず立派な生涯を過ごされた方でした。まさに祖母もその教え通りに生き抜いた、素晴らしい女性だったと心から誇りに思います。二人に想いを馳せれば、尊敬と感謝の念が湧き上がってまいります。



上：信綱自筆歌色紙 下：綱子結ばし作品「虫うり」(山田氏提供)

「ひがし山 夏さりくれば 加茂川の 流にひびく 虫うりの声」

この歌は、曾祖父が九十一歳の時に祖母の結ばしの「虫うり」の作品(昭和三十七年十月)を見て詠まれたもので、一緒に額装され、私が結婚する際に祖母からお祝いにいただきました。

曾祖父と祖母(父と娘)の温かな絆を感じる素晴らしいもので、私共の大切な宝物です。我が家の和室にずっと大切に飾って偲んでおります。(信綱ひ孫、信綱長女綱子の孫)



泉寺住職をされておられ、修行時代には鎌倉の円覚寺で朝比奈宗源老師に師事されたそうです。

衣斐氏は、「修行を積んだ円覚寺からは禅を世界に弘めたことで知られる釈宗演老師が出ており、宗演老師は信綱から歌の添削を受けていた」、「宗演老師の没後、三回忌を悼んで信綱が『楞伽窟歌集』を編んだ」ことなどの興味深いエピソードも紹介されました。



「信綱かるた」より

記念館 ニュース

平成二十六年年度 特別展報告

十一月五日(水)から十二月十四日(日)まで、特別展「信綱の交遊録 ―「明治大正昭和の人々」を中心に―」を開催しました。

特別展は、信綱の著書『明治大正昭和の人々』を中心に、信綱と学界・芸術界の人々や各界・門人らとの交遊について紹介する企画でした。

学界の人々としては『校本万葉集』の編纂に関わった武田祐吉や『広辞苑』の編纂をした新村出ら、芸術界の人々としては歌人の与謝野鉄幹・晶子夫妻や小説家の芥川龍之介・夏目漱石、歌舞伎役者の五世・六世中村歌右衛門、長唄三味線方の四世杵屋佐吉、画家の富岡鉄斎ら、各界・門人としては政治家の吉田茂・雪子夫妻、門人の柳原白蓮ら計



歌舞伎「静」絵看板 言人(五代目鳥居清忠)筆 掛軸

二十一名を取り上げ、大切に残されてきた手紙や関係資料を交えて展示しました。今回の特別展では、信綱と与謝野鉄幹や芥川龍之介らが寄せ書きした「梶の葉形メニュー表」や信綱宛の夏目漱石の手紙等が注目されました。なかでも、信綱が五世中村歌右衛門のために台本を書き、親交を結ぶきっかけともなった歌舞伎「静」、その絵看板(新たに軸装)が、交遊エピソードとともに来館者の目に留まったようです。

信綱一首29

どつちにある、こつちといへば片頬笑み ひらく掌の赤きさくらんぼ

「黎明」所収、昭和二十年刊

孫が両手を閉じてさし出し「どつちにある？」と問う。私が「こつち」と指さすと孫はいたずらっぽく笑って手をひらく。手の中にはまっ赤なさくらんぼが。